

濱下武志・川勝平太編

アジア交易圏と日本工業化一五〇〇—一九〇〇

小瀬 一

表題にある「アジア交易圏」は、近年新たに提起されつつある論点である。その意味するところを、研究史の中にふりかえってみると、八十年代になって、杉原薫氏の石井、關口編『世界市場と幕末開港』（東京大學出版會、一九八二年）に對する書評、濱下武志氏の中國近代史の視角に對する批判的整理に代表されるように、東アジア地域の近代につき從來の西洋を中心とする枠組み内での研究に對する反省の氣運が生じるようになった。それまでも西洋中心の見方が内包する問題點は指摘されていたが、八十年代に生じた議論ではアジア史への志向を持っていた點に特徴があった。杉原氏は從來の日本の工業化への視角に對して「傳統的アジア通商圏そのもののもつ問題を扱わず、その表層で條約と開港場によって辛じて結ばれていた歐米と日本の關係だけをとりだしてあたかも空中戦を活寫するかのように描いてみても、そこから日本の開港―近代化の問題性を浮びあがらせるまでにはまだ相當な距離がある」と述べ、歐米と日本との關係のみならずアジアの經濟關係の中で日本の位置を重要視すべきことを指摘している。また濱下氏の場合はいわゆる西洋中心史觀とともに、從來の「アジア」側を重視する内因論をも否定的に捉らえている。「中國史研究にあつても、内因論が外壓―外因論に對置されるべきものとして主張されてきたのではあるが、從來

の比較史的方法が持つ一國の對應として捉えられたこと、更に生産諸條件の發展段階によつて位置附けられたこと」つまり地域間の相互規定關係が等閑に附され西洋の基準がそのまま地域別、國際的經濟史研究に適用されたため、これまでのいわゆる内因論は結果としてアジアの內的論理の抽出に至らなかつたと言うのである。⁽²⁾この批判に立つて一國史的枠組みあるいはその總和としてのアジア史にかえて、アジア地域を包括する全體史を展開する必要があるといわれているのである。宗主國―植民地關係が縱糸であるとすれば、アジア地域の論理に結ばれる横糸から見た歴史像の提起がなされたのである。初發の關心はおのの別にしながらも、アジア特にアジア市場へと目が向けられたのであつた。

この問題提起にそうアジア史像の提示という課題は、一九八四年の社會經濟史學會での共通論題「近代アジア貿易圏の形成と構造」として取上げられた。その際には一九世紀末の時點で、アジアをアジアたらしめていた紐帶を検證することに主眼があつたと言える。具體的な視點として杉原氏はアジアの貿易構造から、濱下氏はアジアの銀流通問題から、また川勝平太氏は木綿市場の構造をふまえて商品の使用價值から本課題へのアプローチを行っている。⁽³⁾この時點ではアジア市場の諸問題の中でも、特に貿易關係・地域の連關への關心があきらかとなつている。

このうち杉原氏の議論を、後の検討のために紹介しておきたい。杉原氏の論點は、まず一九世紀後半から第一次大戰前にかけての時期、世界經濟にアジアが統合される過程でのアジア間貿易の構造を統計的に描いて見せることにある。アジアにおいて對歐米輸出が増大すればするほどアジア製品の輸入が増す構造、つまり「最終

「需要連關效果」がアジア内部に落ちることを示し、また對歐米輸入が擴大することは社會資本整備を通じてアジア間貿易に資するとともに、その利益を享受したのはアジア人商人であったことを指摘した。通貨に關してはアジアは銀通貨圏として存立したが、一九世紀末までに銀貨圏は崩壊してアジア國際分業體制は、世界經濟に金融的從屬を強めつつ展開したとする。そして世界市場へのアジアの統合は、アジア内部の國際分業體制を發展させてはじめて可能であったこと、アジアでは域内に綿業を發展し得る條件をもつと同時に、技術と市場の擴大を歐米に依存していたことから、アジアのウェスタン・インパクトに對する對應には、自立性と從屬性の両面があったことを論じ、最後に一個のまとまりをもったアジア經濟圏の提起が行われている。一九世紀末以來第一次大戰までの「アジア交易圏」像が、構造的に提示されているのである。⁽⁴⁾

いまだ論議の最中であるが、現在の段階でこの議論が全體として目指すところの意義を概括するならば、まず一國史的枠組みの否定と言う點が擧げられる。それに代つて國レベルを越えた範圍が、歴史研究の對象として提起されているのである。これまでの考察がある國、地域など閉じられた範圍内の内的な論理を重視して展開したのに對して、むしろ地域間の連關それ自體が検討の對象として浮び上がつてきていると言えるであらう。また地域間の關係においては、比較的方法によるよりも相互作用といった動態的側面が重視される議論となっており、このことも本議論の論點を特色づけている。

なによりもこのようなアプローチが、アジアを舞臺になされたことの意義は小さくはない。ただに新たなアジア史像構築の試みであるにとどまらず、日本史研究に對してもあるいは世界體制を考える立

場にも影響を及ぼし得る可能性を持っているのである。その意味でアジアから歴史の大理論を考える端緒ともなり得ると言えよう。

本書は八四年度大會での課題を引き繼いだ八九年の同じく社會經濟史學會でのパネル報告を中心に編纂されたものである。パネルでの表題である「アジア域内交易（一六〇—一九世紀）」と日本の工業化が示すところ、今回は近代の「アジア交易圏」と前近代のそれとの連續、非連續の問題と、「アジア交易圏」と日本の工業化が主題とされたのである。八四年度大會が新たなアジア像の提示に主眼があったとすれば、八九年度大會そして本書の課題は「アジア交易圏」を歴史的に檢討することに一つの重點があったと言える。

以下では本書の内容に觸れつつ、さらに「アジア交易圏」をとりまく議論の概観を進めてゆきたい。それは本書が成り立ちの事情から、書評を持った本々ともいふべき體裁となっており、評者としてはむしろ「アジア交易圏」の議論の流れを紹介することが適當と感ずるからである。本書は次のような構成となっている。

序 濱下武志・川勝平太

I

中國の銀吸収力と朝貢貿易關係

アジア域内交易と東南アジア植民地支配

一七、八世紀東・東南アジア域内貿易と生産技術移轉

一製糖技術を例として

一七世紀の東アジア貿易

一七・一八世紀東アジア域内交易における日本銀

濱下武志
加納啓良

クリスチャン・ダニエルス

永積洋子
田代和生

日本の工業化をめぐる外壓とアジア間競争

川勝平太

Ⅱ ディスカッション

「アジア域内交易圏」をめぐる

岸本美緒

アジアの海とアジアに背をむけた発展志向

齋藤 修

開港後日本の対アジア貿易とアジア間競争

高村直助

外壓としての物産複合——川勝氏の物産複合理論に寄せて

角山 榮

日本の経済発展に於ける「超長期的雁行形態モデル」

山本有造

コメント

アジア域内交易と日本の工業化について

ロバート・イネス

域内史の中の近世日本の國史——目下の課題

ロナルド・トビ

アジア間貿易と日本の工業化

杉原 薫

まとめ

アジア貿易圏の形成と再編

石井寛治

問い直される一六——一八世紀の世界状況

斯波義信

持った本との感想を持つ理由である。まず報告された各論文の内容を概観しておく。

濱下論文は、发展阶段区分としての近代を外的にアジアに適用することを否定し、アジアの内的な歴史過程を重視することを改めて提起する。特に朝貢貿易に注目して、アジア経済史の近代と近代との歴史的連続性を展望している。しかし、アジア史の連続性の内容が、ヨーロッパ勢力の活動がアジアで貫徹しなかったという事態の指摘に置き換えられているように見受けられることもある。アジアの對應力につき、アジア側の論理がさらに詰められる必要があらう。また例えばヨーロッパ勢力がアジア既存のネットワークに依存しつつ、市場に参入したことが言われる時に、この議論の焦点はアジア商人の活力にある。しかし別の所ではイギリス商人であるカントリートレーダーについて、在地的商人として活躍したと述べ、この場合は取引の商品等内容が論点となっている。つまり「アジア交易圏」を言う時擔い手に焦点が当てられているのか、交易関係が重視されているのかが明確になっていないように思われる。このようなことが「アジア交易圏」をめぐる議論を、混乱させていると考えるがこの点は後で再び觸れたい。そしてもう一つの主題である日本の工業化について、その開始の動機を中國商人（商業）の市場における壓力に歸している。また現代にいたるアジアの工業化問題も、朝貢以来のアジア経済史に一つの淵源が求められているのである。

加納論文は、濱下論文とともに「アジア交易圏」の連続非連續問題に係わる内容を持つものである。一九世紀以前において東南アジアでは、アジアの商人を擔い手とする海洋貿易システムがあった。ヨーロッパ勢力の進出も、このアジア内貿易への参入として理解さ

れる。一九世紀前半にはイギリスの覇權が確立するという最初の轉機が生じるが、依然としてアジア域内貿易は重要であつた。その後、一九世紀後半になつてスエズ運河の開通、蒸氣船定期航路の擴大、電信施設でもたらされた第二の轉機によつて、アジア人による貿易の地位低下が引き起こされる。しかしながらヨーロッパ列強による植民地支配が確立する一方で、新しい形のアジア域内貿易とそれを支えるアジア内國際分業の進展が指摘される。すなわち非ヨーロッパ市場に依存する消費財輸出と生産、歐米に市場を見出す工業原料の輸出と生産である。このアジア内國際分業の擴大を前提に、植民地經濟の成長がありえたと論じている。そして戦後の東南アジアの歴史的前提を、この再編後のアジア内の交易關係に見るのである。

ダニエルズ論文は、一九世紀以前のアジアの經濟成長を支えた生産技術の域内移轉に注目して議論を行っている。その際に具體的に取り上げられるのは、製糖技術の中國から東南アジア、日本への移轉である。技術移轉の類型が、中國移民による貿易主導型移轉と、國家主導型移轉の二つに分けられる。東南アジア地域にあたる前者の場合、生産物は輸出志向であり、技術移轉は短期間でなされるが在地への定着度は低いとされる。一方日本でとられた後者のような場合、生産は輸入代替が目的であり、移轉には長期間が必要ではあるが在地人が自ら技術修得を行い技術が在地に根付いたとされる。このような中國の生産技術の海外移轉はアジア域内分業を可能とし、地域の經濟成長の條件となつたとする。そして日本の經驗は、新技術獲得に努める技術者、經營者層をも育てたとする。

永積論文は、一七世紀の中國、日本間の貿易を擔つた商人につき考察を行っている。まず世紀の初頭において中國から日本への商品

を運んでいたのは主にポルトガル人であつたとする。この役割はその後、中國と臺灣間の貿易をおさえたオランダ人にとって代られる。しかし、このオランダ人の活躍は中國船の活動に支えられたものであつた。やがてオランダ人が臺灣を撤退するとともに、中國船の動きが前面へと登場してくると論じている。この永積論文に明確に表れているのであるが、本書は一面で中國商人の活力を改めて認識させる内容ともなっている。

田代論文は、一七、一八世紀の日本から中國への銀流出問題を扱っている。銀生産の減少にともなつて日本では一七世紀後半から銀輸出停止措置がみられるが、實際には一七五〇年代まで朝鮮貿易や琉球貿易のルートを通じて銀流通は繼續したとする。その理由として、一つには最終的に中國へと向かう銀に對する需要が高かつたことがあげられている。さらに日本では中國からの生糸特に白糸に對する需要が強く對價の銀が必要であるのに對して、國內において輸入代替技術が根をおろすまでに時間を要したと言う條件が指摘されている。

川勝論文は、社會生活に欠かせない物産全體を「物産複合」と規定し、これを軸として日本の工業化を論じている。歴史的に中世から近世の時期に西歐と日本とでは、アジア交易圏からの新物産流入によつて「物産複合」が轉換したとされる。この結果日本とヨーロッパは、アジア物産を手に入れるために貨幣素材を輸出し續ける構造に組込まれた。この貨幣素材流出への對應としてアジア物産の輸入代替をすすめるという課題が、ユーラシア大陸の兩端で共有されることになつた。ただ日本とヨーロッパでは代替化の方法に、封鎖經濟體制と開放經濟體制との違いがあつたとされるのである。また

日本の開國は歐米諸國に對すると同時にアジア諸國にも國を開くこととなり、それまで潜在的であつたアジア間の競合關係を顕在化させることを結果した。そして日本の工業化にとつては西洋との競合ではなく、このアジア間競争を勝ち抜くことが重要であつたとする。

先に觸れたように「アジア交易圈」を歴史的に検討するのが、本書の一つの課題であつた。そこでまずもつて問題となるのは、石井氏が「一六一—一八世紀を通ずるアジア貿易圈の歴史的形成と、一九世紀におけるその展開とは、濱下・川勝兩氏のいうように直線的に「連續」するものではなく、後者は、八四年大會での杉原報告や本大會パネルでの加納報告が示唆することく、歐米列強の「外壓」の下に前者が新たな形態に「再編」されたものとして把握すべきではないか」(二七〇頁)と指摘するような連續・非連續の問題である。同様の提起は齋藤氏も、連續的な捉え方に疑義をはさんでいる(二〇三頁)。さらに中國史の側でも宮田道昭氏は、「中國沿海地域に長期にわたつて存在し、開港後には發展の徴候さえ示していた市場構造は一九世紀末に解體し、これに代つて、全く新しいアジア間貿易が形成されたのであつた」と述べて、傳統的な「アジア通商圈」と一九世紀末以降の「アジア間貿易」との差異を指摘している⁽³⁾。しかし單純な連續ではないと考える論者にも、宮田氏のように斷絶面を強調するものから、再編という評價を下すものまで存在しているのである。また各論者においても、單純に連續・非連續を斷じて論をすすめている譯ではない。このような見解の相違は、「アジア交易圈」と言つてもどこに焦點をおいて議論するのが明確でないことに一因がある。すなわち、ヒトを問題としているのかモノ

から評價するのか發言者間で一致がないように思われるのである。大きく分けると非連續を言う場合には交易關係、商品の變化と言つた物流面が注目され、連續面を強調するような場合は中國商人など擔い手を中心の論點となつてゐるのである。「アジア交易圈」を近代と近代を通じて連續するものと理解するか非連續とするかは、各論者が西洋資本主義のアジアへの影響を、流通や生産等が複雑にからみあつた状況のうちどの局面に重點を置きつつ檢證するかに左右されてゐるのである。論點が豊富になることは歓迎すべきであるが、今後は自己の焦點を相互に明らかにしつつ議論を重ねる必要が感じられる。このような點について討論の中でも、岸本氏、齋藤氏から各報告者の持つ枠組みの検討あるいはモノ、カネ、ヒト三つのレベルでの具體像の提示が求められてゐる。「アジア交易圈」の意味内容につきそれを各々のとらえ方にまかす限り、相違を指摘される濱下氏と加納氏の結論との間に符合を見ることが可能なのである。

以上のように各々の視點を相互にふまえないままの議論は、今後の議論の展開の中でも常に問題になるように思われる。そこで次に「アジア交易圈」の代表的な三者の議論をあげて、その議論内容について検討を行なう。その際は「アジア交易圈」を中國研究の側から、いかに受け止められるかを念頭にすすめてゆきたい。

まず川勝氏は、アジア地域における文化的共通性なかでも消費における消費物産の相似に注目をしている。「物産複合」という概念を導入し、ユーラシア大陸の兩端で展開した工業化の動機に共通性を指摘する議論は、その限りにおいて魅惑的である。また一國史的な日本資本主義發達史を批判しようとする姿勢は、今日的な問題意

識の中で意味を持つものである。さらに西洋との競合よりもアジア地域との競合を強調する點は、日本の工業化理解に新しい側面から課題を投げかけたと言える。しかしながら川勝氏にあってアジア（氏の議論では中國、インド）地域は、文明（消費物産）の先進性と生産の停滞性が存在する場として描かれている。ここではアジア間の關連を動態的に把握する視點が弱いように思われる。そしてこのような區分法は開國以後のアジア開競争期を相互關係よりも對立局面の中で描くこととなり、この場合のアジア理解は從來の日本工業化史の中のアジアの位置づけに、むしろ近くなっているように思われる。また日本の工業化をアジア地域のダイナミズムの中で捉えらえるという點で一致すると整理された川勝氏と濱下氏であるが、兩者の間にも大きな相違が存在している。つまりアジア間の競合の中で川勝氏は生産面に注目するのに対して、濱下氏は流通面を重視しているのである。このことも川勝氏の議論が、結果的に從來の生産を中心とする經濟史研究へと接近する理由となっている。つまりアジアからの視點という當初の問題提起にもかかわらず、アジアの役割は西歐と日本の工業化の觸媒としてのそれにとどまっているかのようである。川勝氏の議論は、從來の一國史的な日本工業化史研究の文脈において場合に批判の意味を持つものであるが、アジアの存在は歴史解釋の中で依然として客體の位置に残されたままと言えよう。⁶⁶

杉原氏の議論では、統計を操作することで一九世紀末以來のアジア地域の貿易關係が具體的に示される。また「最終需要連關效果」を用いて説明される世界市場とアジアそしてアジア域内の貿易連關の機構は、受け入れられつつある論點となっている。さらにアジア

の「綿業基軸體制」の中で日本の工業化を位置づける方法は、最初の問題意識にあった一國史的日本工業化への批判に應ずるものとなっている。しかしながら、杉原氏自身が強調していることでもあるが、綿製品以外のアジア交易における位置の考察がなお存在するように思われる。特にこの分野の貿易では、中國商人の市場支配の問題が係わってくる。杉原氏の議論が構造的であるだけ、必ずしも組上にのぼらない中國商人の具體的な活動状況を、どのように位置づけるかの問題でもある。また中國の側から見た場合、中國の扱われ方に問題を感じないわけではない。それは中國が一國として分析の對象とされていることである。「アジア經濟圈」の議論は一國史的視點の克服を展望しているが、中國の場合には對外的に開かれるだけではなく、國內經濟的にも觀點の轉換が求められるのである。すでに中國では國內各地域ごとに經濟的な偏差があることが知られている。中國研究での一國史的觀點の克服は對外關係での文脈と同時に、濱下氏も指摘するような中國を地域經濟の連合體と見る視點からも行われるべきであらう。例えば東南アジアと華南等の關係を考えると、ひとまとまりの經濟單位としての中國を一方にすえるのであれば、他のアジア地域との關連が十分に説明できないように思われる。この場合は東南アジアと華南が一つの經濟地域として、どのように華中地域等との關係を持つかを考える必要がある。世界經濟から中國への規定性の問題は、世界經濟と結びついてゆくことで中國内の地域と周邊地域との編成がどのように變ったかという問題として捉え直す必要があらう。ただし杉原氏の關心は世界資本主義の展開とアジア開貿易の連關にある。世界資本主義がアジアへと浸透する過程で、例えば中國がいかに包攝されたのかを問う視點が

基本にあるのである。その場合の分析対象はマクロ的であって、杉原氏の議論で中國が一國的に扱われるのはむしろ當然かと思われる。そのためこの點は中國研究の側から、いかに應えるかが問題として残されているのである。

アジアの側から世界經濟を見ると言う觀點を、前面に打ち出したのは濱下氏の議論である。濱下氏は朝貢關係＝朝貢貿易關係を、「朝貢貿易體制」としてアジアの歴史的紐帶を説明する一つの歴史的體制と捉えらる。朝貢關係の經濟的側面を強調しつつなされるこの議論は、アジア内に存在した關係を經濟面だけではなく政治、文化面も含んで把握されていることに特徴がある。しかし前近代のアジア内交易の展開に朝貢關係が果たした役割が否定できないにしても、「朝貢貿易體制」と「アジア交易圈」との關係は問われる必要があろう。それは朝貢體制が制度的に終焉する（四八頁）辛亥革命以降のアジア交易を想定する場合に、明確な問題となってくる。言い換えるならば朝貢關係の經濟面だけを取りだした上で議論して見るのでなければ、歴史的連續性を考察出来ないのではなからうか。「朝貢貿易體制」の際でもあるが濱下氏の主張では、「關係」ということが重視される。經濟を問題とする時も各地域内の市場構造よりも、地域間の交易關係が重視されているのである。そして中國國內についても地域經濟の集合體として考察する視點を提示しているのである。このことを杉原氏の議論との關連で言えば、華南經濟圈の世界市場への統合と言うような問題の立て方を可能とするものである。しかしシステム論の一つとして見る時、濱下氏の議論には問題も感じられる。言葉がイメージに追い付かないような状況とも言い得るかも知れない。例えば「域圈」概念の意味するものであ

る。「域圈」は、國境を越えた規模で機能するとされている（二三頁）。この「域圈」規定と地域經濟の集合體としての中國經濟像を重ねてみると、「域圈」は例えば華南と東南アジアの經濟圈と言う段階から「アジア交易圈」までも含むような幅の廣い範疇となる。別に「域圈」は「國際」と「國家」の中間に位置するとされるが、「國家」と「地域經濟」の中間項としての意味も持ち得るのである。そのため「域圈」を用いて議論を行う場合には、どのような「關係」を指標として經濟圈が構想されているのか、その内容を明らかにする必要がある。總じて「域圈」は從來の「國民經濟」に代る概念たることを期待されながら、まだその内實を十分に持つにはいたっていないと思われる。現段階において「域圈」の提起は、一國史的視點に立たない經濟圈分析という方法論を示すものとして存在しているのである。

以上のように「アジア交易圈」の枠組とは言っても、おのおのの意味内容は多様である。それはこの議論が必ずしもモデル形成を意識して組織的に、行われていないことを反映している。しかしながらその示唆することの意義を認めて、今後ある程度共通の議論としての展開を圖るには目的的な事例の積み重ねが求められる。具體的課題として一つには、流通面での中國商人の優位さを説明して、史料上言われる中國商人の「團結力」の検討がある。日本史研究の中ではすでにこの點への關心も高まっているが、「團結力」として外部世界から把握された中國商人の結びつきを內的論理から考察する必要があろう。その際、活動據點の在り方に代表されるようなネットワークの存在と意味が焦點となろう。また一つの焦點は杉原氏と濱下氏の議論の間を、いかに埋められるかにあるように思われる。

先にも觸れたように、杉原氏の議論は世界市場とアジアの交易との関連も含め、最も具體的なシステムとしての「アジア交易圏」像を示している。一方で濱下氏の地域經濟の集合體と言う中國經濟像の提起は、アジア經濟像の展開をはかる上で鍵となるものである。兩者を接合する經濟像は中國内の地域經濟を、域内外と結ぶ實證作業を行うことから求められよう。先の商人活動とも係わることであるが特にアジア域内の國際商品を取り上げて、内外の流通を追うことがまずある。これには送金、爲替と言った金融問題が關連するが、中國内國爲替は外國爲替と等しいと言う戰前來の指摘はここでも有用である。また地域間の連關については、明清史研究の中でも盛んになりつつある。前近代との（非）連續を言う時に、それとの對話が必要となる⁽⁹⁾。近年は近代の劃期が問い直されつつあり、ややもすれば途絶えがちであった「近代」「前近代」の交流の條件は整いつつあると思われる。

「アジア交易圏」をめぐる議論も最初の提起から、すでに一〇年以上を経たことになる。その間に理論的對話が積み重ねられるとともに、本問題に對する理解も廣がりつつあると思われる。現に日本、アジア研究者の討論の場とはなっているのである。しかし、初めにあげたようにさらに展開し大理論の端緒となつてゆくには、具體的實證がより求められる段階にあるように思われる。以上非常に拙い紹介を行ってきた。的を射ぬ言辭を重ねたと畏れるが、ここで觸れたようなことは當然ながら自らの責務ともすべき問題と自覺している⁽¹¹⁾。

註

- (1) 杉原薫「書評石井寛治、關口尙志編『世界市場と幕末開港』『土地制度史學』一〇四號（一九八四年）七〇頁。
- (2) 濱下武志「近代アジア市場とイギリス」『史海』三〇號（一九八三年）六、七頁。のち加筆のうえ同氏「近代中國の國際的契機」（東京大學出版會 一九九〇年）に收録。
- (3) 濱下武志「近代アジア貿易圈における銀流通」、川勝平太「アジア木綿市場の構造と展開」とともに『社會經濟史學』五一卷一號（一九八五年）。なお濱下論文はのち同氏註(2)著書に收録。
- (4) 杉原薫「アジア間貿易の形成と構造」『社會經濟史學』五一卷一號（一九八五年）。なおアジア交易の基本的な構造について、Kaoru Sugihara "Patterns of Intra-Asian Trade, 1898—1913," *Osaka City University Economic Review*, No. 16, 1980. で先に提示されている。
- (5) 宮田道昭「近代アジア間貿易と中國沿海市場圈」『思想』八一〇號（一九九一年）一二四頁。
- (6) なお本論文の内容をさらに展開したものに、川勝平太『日本文明と近代西洋』（日本放送出版協會 一九九一年）がある。
- (7) 濱下武志「朝貢貿易システムと近代アジア」『國際政治』八二號（一九八六年）のち同氏註(2)著書に收録。
- (8) 籠谷直人「一八八〇年代のアジアからの「衝擊」と日本の對應——中國人貿易商の動きに注目して」『歴史學研究』六〇八號（一九九〇年）。同「アジアからの「衝擊」と日本の近代——中國人貿易商の「團結力」に注目して」『日本史研究』

三四四號（一九九一年）。

(9) 例えば田中忠夫『支那内國爲替』（大阪屋號書店 一九二一年）は、この認識に基づいている。

(10) 當該期における市場研究への問題提起としては、山本進「清代市場論に關する一考察」『歴史學研究』六〇三號（一九八九年）参照。

(11) 「アジア交易圈」にかかわる最近の議論としては、古田和子「上海ネットワークの中の神戸——外國綿製品を運ぶ中國商人——」『年報近代日本研究』一四（山川出版社 一九九二年）がある。

一九九一年六月 東京 リプロボート
B 6 版 二八三頁 二、二六六圓

中村哲夫著

同盟の時代

——中國同盟會の成立過程の研究——

田 中 比呂志

はじめに

近年の中國近代史研究の數量的増加は、各専門雜誌の文獻目錄類の頁數の増加に如實に現れているように極めて著しい。かかる現象は研究者數の増加、史料の大量出版などの物理的條件の變化によるところが大きいように思われる。それでは質的にはどうであろうか、と考えてみるならば、やはりかなり大きな變化がみられるようである。すなわち、研究分野の擴大、パラダイムの轉換、研究の擴散的狀態などという現象である。このような狀況は一九八〇年代初頭頃から顯在化してきており、それと不可分のものとして「中國近代史像の再檢討」という言葉もまた頻繁に使われるようになった。戦後の日本の中國近代史研究が、良くも悪くも大陸の中國近代史研究に影響を受けてきたことは周知のことである。そしてややもすれば政治狀況に翻弄され易い學界狀況にあった大陸や臺灣の研究に比して、日本の研究が大きな成果を擧げてきたこともまた確かである。しかし、その日本の研究自體が今まさに大きな轉換の局面を迎えていることも否定できない。

さて、本書には辛亥革命期を取り扱った研究論文が收められてい